

## 2020. 8. 2. 聖霊降臨節第10主日礼拝式説教

### ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書12章1-12節

#### 『公に告白する』

先週の礼拝説教の聖書箇所と今日の聖書箇所とは、ある意味対になっている聖書箇所、と言えるのではないかと思います。先週の聖書箇所では「あなたたちは不幸だ」という主の言葉でそれぞれファリサイ派と律法の専門家に対して三つのことが語られていました。今朝の聖書箇所では、「ファリサイ派の人々のパン種に注意なさい。それは偽善である」という主の言葉で、やはり三つのことが今度は弟子たちに向かって語られているのです。

「偽善」ということに注意なさい、というのが今日の聖書箇所の括りです。しかし、主イエスはただ偽善というのではなく、わざわざファリサイ派の人々のパン種に注意なさい、と言われるのです。パン種というのは今で言うイースト菌のことです。パンを膨らませる酵母です。つまり偽善というものは、はじめ小さなものであっても、それがわたしたちの生活の中で、さまざまな形で大きく膨らんで、わたしという人間を作っていく、ということなのでしょう。

さて、偽善ということなのですが、普通にわたしたちが使う意味は、心や行いが正しいように見せかけること。うわべだけ取り繕っての善い行い、というようなことです。偽りの善という言葉そのままの意味です。先週の主イエスの言葉で言えば、外側はきれいにするが、内側は強欲と悪意に満ちている、というのがまさに偽善ということでしょう。しかし、偽善という言葉、聖書のもとの言葉ではそれだけの意味ではありません。この言葉はもともと演ずる、演技するという意味でした。仮面をつけて、自分ではないある役割を演ずる、ということを表す言葉でした。そこから装うという意味が出てきて、偽装する、欺瞞、偽善という意味が出てきました。

話を分かりやすくするために、二つのことを考えてみます。

一つは、ある人が、自分がある者であるかのように見せること。例えば本当は善人でも何でもないので、善人であるかのように見せる、というようなこと

です。

もう一つは、それとは逆のケース。ある人が自分があるものでないかのように見せること。例えば自分はイエス・キリストの弟子なのに、ある場面で自分は弟子でないかのようにふるまう、というような場合。これも偽善なのです。ペトロは主イエスの逮捕後、お前はあいつの仲間だ、と問い詰められた時、そんな人は知らない、と言いました。知っている自分なのに、知らない自分を演じたのです。あれが偽善なのです。

今日の聖書箇所は偽善という言葉で三つのことが語られているといいましたが、その場合の偽善とは、今あげた、ある人が自分があるものでないかのように見せること、そこに関わることなのです。

最初に語られている「覆われているもので表されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはない。」とはどういうことでしょうか。

覆われているもので現されないものはない、というのは神が見ていないと思ってやっているあなたの行動、言葉、生き方、それは全部神の前で明らかにされていくのだということです。あなたの一週間の生活、もしその歩みの中で神の目よりも人の目を気にして生きているというようなことばかりで、あたかも神が見ていないかのように、生きているとするなら、それは偽善だということです。あなたが暗闇で言ったことや耳元で囁いたことも、皆あらわになる。だからこそこそするなということではなく、あなたの小さな一言も、福音の証しとして用いられる、と主は言っておられるのです。ささやかな言葉であっても、それは神によって用いられ、明るみで伝えられていく、そのことを受けとめなさい、と言っておられるのです。

4節からの二つ目の話も、根本は同じです。本当に恐れるべき方を知っているながら、自分の肉体の死をもっとも恐れて、ほんとうに畏れるべき方のことを知らないかのように生きる、それは偽善だ。ほんとうに畏れるべき方は、この世界の終末の完成者、裁き主なる神である。神はわたしたちのことをよくよく知っていてくださる。人が気にも留めない雀ですら、神は覚えてくださっている。それを知っていながら、知らないように生きるとすれば、それは偽善なのです。

三つ目の話は8節以下ですが、8節は元の言葉では「人々の前でわたしのことを告白する者はみな、人の子もまた神の天使たちの前でそのもののことを告白するであろう」となって、ただたんに言い表すのではなく、告白する者です。人々の前でキリストのことを証しし、告白する者は、キリストもまた天使の前でそのもののことを証しする、とされているのです。

「しかし、人々の前でわたしを知らないというものは、神の天使たちの前で知らないといわれる。」ここでも問題となっているのは、知っているのに、知らないものとして生きる、ということです。救い主イエス・キリストのことを知っているのに、知らない者のように何の証も告白もしない、それが主イエスが言われるファリサイ派のパン種としての偽善です。

主イエスはこの偽善に注意しなさい、と言われましたが、偽善は絶対ダメだとか、偽善に生きるような奴はダメだ、と単純に言われたものではありません。

「注意しなさい」といわれたのです。これはとても大事なところです。それはなぜか。わたしたちは自分が偽善に生きたくない、と思ってもその通りに生きることができないからです。

ペトロははじめから、主イエスが逮捕されたら、主イエスのことなど知らないと言おうと思っていたわけではなかったでしょう。主よ、あなたとご一緒なら、牢に入っても死んでもいい、と思っていたのです。だが、土壇場になったら、恐ろしさからか、知らないといってしまったのです。その時ペトロが恐れたのは、自分も逮捕され、肉体を拘束され、へたをすれば殺されるという恐れで、神への恐れではなかった。神を畏れて生きているつもりなのにペトロが、人を恐れて、知らないといってしまったのです。

主イエスは偽善のことをファリサイ派のパン種と呼びました。ファリサイ派というのは、先週見たように特別悪い人ということではまったくなく、人々から尊敬されるような、信仰心も見識もある人々でした。そのような人たちが、言行不一致にならざるを得ない、偽善に生きてしまう。

パウロがローマの信徒への手紙の7章で書き記している言葉。「わたしは自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。」という言葉があります。

パウロは知っていたのです。知っていたというよりも、ここにはパウロの魂の呻きがあります。自分の内に善が住んでいないことを知っている、これは誰にでも伝わることではない。ペトロやパウロのように、福音に聞いて生きた人がその中で知らされてきた人間の現実なのでしょう。今日の聖書個所で言えば、偽善であるしかない自分がいるということです。どうせ俺なんか偽善者だよ、と開き直っているのではない。真実に生きようとするのだが、気がつくとな偽善の中にいる、そういう人間の痛みを伴う現実を語っているのです。キリストはここで、偽善と縁を切れとか、偽善に生きるような奴はダメだとは言っておられない。人が生きるということは、望まなくても、偽善を生きることになるのですから。偽善に注意なさい、それはあなたの中にある偽善に自覚的になるということです。ペトロが、イエス・キリストの弟子でありながら、あの場所でキリストのことは知らないと言ってしまったように、わたしたちもキリストのことを知っていながら、知らないもののように生きてしまう。神を畏れることを知りつつも、もっと別の人の目を恐れて生きてしまう。ここで、キリストを公に告白し証しするのだ、という時に、キリストと無縁のもののように時をやり過ごしてしまう。そういう自分であることを受けとめつつ、なおそのような自分が聖霊の働きの中で、公に告白し証しする者とさせられていく、そのことを大胆に信じなさい、と言っておられる。一方で偽善の自分に自覚的でありつつ、一方で、さらにその自分に働きかけてくださる聖霊の働きを信じていく。自分の望む善を実行できないわたしも、聖霊の働きの中にあることを信じて受けとめていく、聖霊はこの弱い自分をも活かし、用いて、キリストを証しし、公に告白する者としてくださる、主はそう語っておられるのです。